

『菩薩惣持法』と『觀心論』(二)

田 中 良 昭

(承前)

三 『觀心論』の本文校訂とその訓読

(一)

『觀心論』の異本については、既に述べた通り極めて多くのものが存在するが、敦煌本についても、先にその題名の表記について挙げた七種以外に、更に第三問答の一部と一致する内容を有するS六四六の存在が報告されている。(柳田聖山「語録の歴史——禅文献の成立史的研究」『東方学報』第五十七冊 二六四頁参照)とあるのでその本文については、既に古く一九三六年に、鈴木大拙氏が『校刊少室逸書及解説』の附録として出版された『達摩の禅法とその思想及其他』の末尾に、「達摩觀心論(破相論)五本対校」と題して、以下に示す五種の異本を各々校定し、全文を一五段に区切って対照されている。(一八四—二三二頁) すなわち鈴木氏のいわれ

る五種とは次の通りである。

敦煌出土本——大正藏經八五卷所収S二五九五本

竜 谷 本——竜谷大学所蔵『西天竺沙門菩提達摩禪師觀

門法大乘法論』(敦煌出土)所収本

金沢文庫本——金沢文庫所蔵建長四年夜叉王丸再写本

朝鮮版本——『禪門撮要』所収本

日本流通本——大正藏經四八卷所収『少室六門』所収本

従って『觀心論』の内容及び五種異本間の異同については、その対照によって一目瞭然であるが、多くの中国初期禅宗語録の国訳乃至は現代語訳等がなされている中で、この『觀心論』については、そうした試みが未だなされていない。そこで昭和五八年度大学院修士課程の演習にこのテキストを取り上げ、その異本対校による定本作りと内容の吟味を行った。その際に底本として用いたのが、先に題名表記の表にあげた敦煌本七種の内、首尾完全(中途極く一部脱漏あり)な

P 四六四六である。

このP 四六四六は、梵夾葉一八二葉からなり、一葉縦二七糲、横八糲、六行の野入りで、中央上から七糲の所に穴があげられ、金色の糸で綴じられ、各葉表裏にわたって整然とした書体で書写されており、表の欄外中央に丁数を表示する番号が付されている。その内容は、一葉表より八七葉表までが『維摩詰所説経』、八七葉裏より一二六葉表までが『文殊師利所説般若波羅蜜経』、一二六葉裏より一五八葉表までが『頓悟大乘正理決』でここまでが同筆、一五八葉裏は白紙で一旦区切られ、改めて一五九葉表より一七五葉表までが『観心論』、一七五葉表より一八二葉裏までが『禅門経』で、この二種が同筆であり、先の三種よりやや大きい目の太い字となり、丁数も再び一から付されている。以上五種の文献の内、第三の『頓悟大乘正理決』は、禅師摩訶衍とインド僧とによるチベットにおける宗論の記録であり、本来はチベット本土で著わされたものであり、この写本そのものがチベットで書写された敦煌に搬入されたものか、敦煌で転写されたものかは不明であるとしても、用紙が敦煌のチベット支配期の目の粗い紙を貼り合せているものであることからして、上山大峻氏は、この写本を、敦煌の禅の写本群を三時期に区分して、七五〇—七八〇年頃の初期、チベット支配期（七八一—八四八）中、及びその影響の残る若干期間で七九〇—八六〇年頃の中期、

そして帰義軍時代に入って以後の九〇〇—一〇〇〇年頃とする内の中期の写本に位置づけられている。（上山大峻「敦煌における禅の諸層」『竜谷大学論集』四二二号、八八一—二二頁参照）

さて、再び本題に戻り、演習の際に用いた方法については、P 四六四六の本文を鈴木大拙氏の区分に従って一五節に分けてそれを上段に記し、その読み下し文を中段に書き、鈴木氏が用いた五種の異本との相違がある場合には、それをすべて下段に記し、更に必要に応じて語注を加えるというような、かなり詳細なプリントを担当者が用意し、それを元に、演習参加者の討議によって、定本作りとその訓読文を作成するということであったが、ここではそれ等のすべてを含めることは到底不可能なので、本文については、底本としたP 四六四六を訂正した部分についてのみ、それを何に拠って改めたかを注記するに止め、異本校訂と語注もすべて割愛せざるを得なかった。尚鈴木氏が対照された五本は、先にも示した通り、敦煌出土本、竜谷本、金沢文庫本、朝鮮版本、日本流通本と呼称されているが、ここでは繁をさけるため次のような略符号を用いることにする。

敦煌出土本—敦

竜 谷 本—竜

金沢文庫本—金

朝鮮版本一〇

日本流通本一〇

前述の通りこの『観心論』定本作成の試みとその訓読は、院生との共同作業によるものであり、私自身よりは、それぞれ担当箇処のプリントを用意された院生諸君の努力によるところ大なるものがある。ここにこの演習に参加された院生の小川隆、立身一徳、鄭茂煥、二村英文の諸君、及びたまたま内地留学をされていて参加され、種々貴重なアドバイスをして下さった愛知学院大学の鈴木哲雄先生に対し、心から感謝の意を表する次第である。

(二)

観心論

観心論

問、若復有人、志求仏道、当脩何法、最為省要。

問う、若し復た人有りて仏道を志求せんには、当に何の法を修めてか最も省要と為すべき。

答曰、唯観心一法、惣撰諸行、名為最要。

答えて曰く、唯だ観心の一法のみ、惣て諸行を撰め、名づけて最要と為す。

又問、云何云一法能撰諸行。

又問う、云何んが一法の能く諸行を撰すと云うや。

答曰、心者万法之根本也。一切諸法、唯心所生。若能了心、則万行俱備。

猶如大樹所有枝条及諸花菓、皆悉因根生長、裁樹者存根而始生、伐樹者去根而必死。了心脩道、則省力而易成。不了心者、所脩乃費功而无益。故知一切善惡皆由自心。若心外別求、終无是法。

答曰、菩薩摩訶薩、行深般若波羅蜜多時、了於四大五蔭、於空无我中、了見

答えて曰く、心は万法の根本なり。一切諸法は唯だ心の生ずる所のみ。若し能く心を了ぜば、則ち万行俱備する。猶お大樹の所有る枝条及び諸々の花菓は、皆な悉く根より生長し、樹を裁うるは根を存して始めて生き、樹を伐るは根を去りて必ず死せるが如し。心を了じて道を修むれば、則ち力を省きて成じ易く、心を了ぜざれば修する所は乃ち功を費して益無し。故に知る、一切善惡は皆な自心よりす。若し心外に別に求めば、終に是の法無し。

又問、云何観心稱之為了。

答曰、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜多を行じし時、四大五蔭を了じ、空无我の中に於いて自心を了見す。二種の差別有り。云何んが二と為す。一は

又問う、云何んが観心、之を稱して了と為す。

答えて曰く、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜多を行じし時、四大五蔭を了じ、空无我の中に於いて自心を了見す。二種の差別有り。云何んが二と為す。一は

又問う、云何んが観心、之を稱して了と為す。

答えて曰く、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜多を行じし時、四大五蔭を了じ、空无我の中に於いて自心を了見す。二種の差別有り。云何んが二と為す。一は

又問う、云何んが観心、之を稱して了と為す。

答えて曰く、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜多を行じし時、四大五蔭を了じ、空无我の中に於いて自心を了見す。二種の差別有り。云何んが二と為す。一は

又問う、云何んが観心、之を稱して了と為す。

答えて曰く、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜多を行じし時、四大五蔭を了じ、空无我の中に於いて自心を了見す。二種の差別有り。云何んが二と為す。一は

又問う、云何んが観心、之を稱して了と為す。

答えて曰く、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜多を行じし時、四大五蔭を了じ、空无我の中に於いて自心を了見す。二種の差別有り。云何んが二と為す。一は

又問う、云何んが観心、之を稱して了と為す。

答えて曰く、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜多を行じし時、四大五蔭を了じ、空无我の中に於いて自心を了見す。二種の差別有り。云何んが二と為す。一は

又問う、云何んが観心、之を稱して了と為す。

答えて曰く、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜多を行じし時、四大五蔭を了じ、空无我の中に於いて自心を了見す。二種の差別有り。云何んが二と為す。一は

又問う、云何んが観心、之を稱して了と為す。

自心。有二種差別。云何為二。一者淨心。二者染心。其淨心者、即無漏真如之心。其染心者、即是有漏无明之心。二種之心法、尔自然、本来俱有。雖假緣合、本不相生。淨心恒樂善因。染体常思惡業。若真如自覺、不受所染、則稱之為聖、遂能遠離諸苦、証涅槃樂。若隨緣造業、受其纏縛、則名之為凡。於是沉淪三界、受種種苦。何以故。由彼染心。鄭真如体故。十地經云、衆生身中有金剛仏性、猶如日

淨心。二は染心。其の淨心とは、即ち是れ無漏真如の心なり。其の染心とは、即ち是れ有漏無明の心なり。二種の心法は、爾り自然にして、本来俱に有り。縁を仮りて合すと雖ども、本と相生ぜず。淨心は恒に善因を樂い、染体は常に惡業を思ふ。若し真如自覺、所染を受けざれば、則ち之を稱して聖と為し、遂に能く諸々の苦を遠離し、涅槃の樂を証す。若し縁に隨いて業を造り、其の纏縛を受くれば、則ち之を名づけて凡と為す。是に於て三界に沉淪し、種種の苦を受く。何を以ての故に。彼の染心、真如の体を障うるに由るが故に。十地經に云く、衆生の身中に金剛の仏性有り、猶お日輪の体明円満、廣大無辺なれども、止だ五蔭重雲の覆う所と為れるが如く、瓶内の燈光の顯了する能わざるが如し。又た涅槃經に云く、一切衆生皆な仏性有り。無明覆うが故に、解脱を得ず。仏性は即ち覺性なり。但だ自覺覺他、智恵明了

輪体明円満、廣大无边、止為五蔭重雲所覆、如瓶内燈光不能顯了。又涅槃經云、一切衆生、皆有仏性。无明覆故、不得解脱。仏性者即覺性也。但自覺覺他、智恵明了、離其所覆、則名解脱。故知一切諸善以覺為根。因其覺根、遂顯現諸功德樹、涅槃之果、因此而成。如是觀心可名為了。又問、上説真如仏性一切功德因覺為根、未審无明之心、一切諸惡、以何為根。

にして、其の覆する所を離れば、則ち解脱と名づく。故に知る、一切諸善は覺を以て根と為す。其の根を覺すに因りて、遂に諸々の功德の樹を顯現し、涅槃の果、此れに因りて成す。是の如く、觀心は名づけて了と為すべし。

又問う、上に真如仏性、一切功德、覺に因りて根と為すと説くに、未審、無明の心、一切諸惡、何を以て根と為す。

答曰、无明之心、雖有八万四千煩惱情慾、及恒沙衆惡、无量无边、取要言之、皆因三毒、以為其本。三毒者、即貪瞋癡是也。此毒心、自具足一切諸惡、猶如大樹。根雖是一、所生枝葉、其无量數。彼三毒根中、有諸惡業。百千万億倍、過於前、不可為喻。如是三本心、於本体中、自為三毒。若応現六根、亦名六賊。具六賊者、則名六識也。出入諸根、貪著万境、能成惡業、損真如体、故名六賊。一切衆

答えて曰く、無明の心、八万四千の煩惱、情欲有り、及び恒沙の衆惡、無量无边なりと雖も、要を取りて之を言えば、皆、三毒に因りて、以て其の本と為す。三毒とは、即ち貪瞋癡、是れなり。此の毒心、自ら一切の諸惡を具足す、猶お大樹の如し。根は是れ一なりと雖も、生ずる所の枝葉、其れ無量數なり。彼の三毒の根中に、諸惡業有りて、百千万億倍し、前より過ぎて喻と為すべからず。是の如く、三つの本心、本体の中に於て、自ら三毒と為るなり。若し六根に應じ現せば、亦、六賊と名づく。六賊を具するは、則ち六識と名づくなり。諸根に出入し、万境に貪著し、能く惡業を成し、真如の体を損う。故に六賊と名づく。一切衆生、此の三毒、及以六賊に由りて、身心を惑亂し、生死に沈没し、六趣に輪廻して、諸々の苦惱を受く。又、江河有り。少泉の源に因るも、涓流して絶えず、乃ち能く弥漫し、波濤万里な

生、由此三毒、及以六賊、惑亂身心、沈没生死、輪廻六趣、受諸苦惱。又有江河、因少泉源、涓流不絶、乃能弥漫、波濤万里。若復有人、断其本源、則衆惡皆息。求解脱者、除其三毒、及以六趣、自然永離一切諸苦。

又問、三界六趣、廣大无边。若唯觀心、云何免彼之无窮之苦。

答曰、三界業報、唯心所生。本若无心、則无三界。三界者即是三毒也。貪為慾界、嗔為色

り。若し復た人有りて、其の本源を断たば、則ち衆の惡は皆な息む。解脱を求むる者は、其の三毒及以六趣を除き、自然に永く一切の諸苦を離る。

又問う、三界六趣は廣大无边なり。若し唯だ觀心のみならば、云何んが彼の無窮の苦を免れん。

答えて曰く、三界の業報は、唯心の生ずる所なり。本若し心無ければ、則ち三界無し。三界とは即ち是れ三毒なり。貪は欲界と為し、嗔は色界と為し、癡は無色界と為す。此の三心に由

界、癡為无色界。

由此三心、結集諸惡、業報成就、輪廻不息。故名三界。又由三毒、造業輕重、受報不同、分歸六處。故名六趣。

又問、云何輕重分之為六。

答曰、若有衆生不了正因、迷心修善、未免三界、生三輕趣。云何三輕所為。迷修十善、妄求快樂、未免貪界、生於天趣。迷持五戒、妄起愛憎、未免嗔界、生於人趣。迷執有為、信邪求福、未免癡界、生阿脩羅趣。如是三類、名

りて諸惡を結集し、業報成就して輪廻息まず。故に三界と名づく。又三毒の造業の輕重に由りて、報を受くること同じからず、分れて六處に歸す。故に六趣と名づく。

又問う、云何が輕重、之を分ちて六と為す。

答えて曰く、若し衆生有りて正因を了ぜず、迷心にて善を修するも、未だ三界を免れず、三輕趣に生ぜん。云何んが三輕の為う所ぞ。迷にして十善を修し、妄にして快樂を求むれば、未だ貪界を免れず、天趣に生ず。迷にして五戒を持し、妄にして愛憎を起せば、未だ嗔界を免れず、人趣に生ず。迷にして有為に執し、邪を信じ福を求むれば、未だ癡界を免れず。阿修羅趣に生ず。是の如き三類を三輕趣と名づく。云何が三重なる。所謂る三毒心を縦い

三輕趣。云何三重。所謂縦三毒心、唯造惡業、墮三重趣。若貪業重者、墮餓鬼趣。嗔業重者、墮地獄趣。癡業重者、墮畜生趣。如是三重、通前三輕、遂成六趣。故知一切苦業、由自心生。但能攝心、離諸邪惡。三界六趣輪廻之苦、自然消滅、則名解脱。

又問、如仏所説、我於三代阿僧祇劫、无量勤苦、乃成仏道。云何今説、唯除三毒即名解脱。答曰、仏説三世阿僧祇劫者、漢言不

ままにして、唯だ惡業を造るのみなれば、三重趣に墮つ。若し貪業重ければ、餓鬼趣に墮つ。嗔業重ければ、地獄趣に墮つ。癡業重ければ、畜生趣に墮つ。是の如き三重は、前の三輕に通ずれば、遂に六趣を成ず。故に一切の苦業は、自心より生ずと知る。但だ能く心を攝することのみが、諸々の邪惡を離る。三界六趣輪廻の苦、自然に消滅すれば、則ち解脱と名づくるなり。

又問う、仏の説く所の如きは、「我、三代阿僧祇劫に於いて、無量に勤苦して、乃ち仏道を成ず」と。云何んが今「唯だ三毒を除くのみにして、即ち解脱と名づく」と説くや。答えて曰く、仏の説く三世阿僧祇劫とは、漢言の不可数なり。此の三毒心に

可数。由此三毒心、⁽¹²⁾於一念中、有恒河沙衆惡。一念中、皆為一劫。恒河沙者、不可数也。真如之性、被三毒之覆鄣。若不超彼三世恒沙毒惡之心、云何得解脱也。今者能除貪嗔癡等三種毒心、是則名度得三世阿僧祇劫。末世衆生、愚癡鈍根、不解如来三種阿僧祇劫秘密之說、遂言、成仏⁽¹⁴⁾歴劫末期。豈疑悟行人、菩提道也。

又問、菩薩摩訶薩、由持三聚淨戒、行六波羅蜜、方成仏

由りて、一念中に恒河沙の衆惡有り。一念中、皆な一劫と為る。恒河沙とは、不可数なり。真如の一劫と為る。恒河沙とは、不可数なり。真如の性は三毒に覆鄣せらる。若し彼の三世恒沙の毒惡の心を超えずんば、云何んが解脱を得んや。今者、能く貪嗔癡等の三種の毒心を除く、是れ則ち、三世阿僧祇劫を度得すと名づく。末世の衆生は、愚癡鈍根にして、「如来三種阿僧祇劫の秘密の說」を解せず、遂に言く、「成仏は歴劫末期なり」と。豈に悟行人の、菩提の道を疑わんや。

又問う、菩薩摩訶薩は、三聚淨戒を持し、六波羅蜜を行ずるに由りて、方て⁽¹⁵⁾仏道を成ず。今、学者をして、唯只心⁽¹⁶⁾

道。今令学者唯只観心、不脩戒行。云何成仏⁽¹⁷⁾。答曰、三聚淨戒者、則離三毒心、成无量善。聚者会也⁽²⁰⁾。以制三毒、即有三无碍善、普会於心。故名三聚淨戒也⁽²¹⁾。六波羅蜜者、即六根、漢言達彼岸。以六根清淨、則不染世塵、即出煩惱、可至菩提岸也。故名六波羅蜜。

又問、如經所說、三聚淨戒者、誓断一切惡、誓脩一切善、誓度一切衆生。今者言制三毒心、豈不文義有所乖也。

を觀するのみにして、戒行を修せざらしむ。云何が成仏せん。答えて曰く、三聚淨戒とは、則ち三毒心を離れ、無量善を成ずるなり。聚とは会するなり。以て三毒を制さば、即ち三無碍善有りて、普く心に会す。故に三聚淨戒と名づくるなり。六波羅蜜とは、即ち六根、漢に達彼岸と言うなり。以て六根清淨とならば、則ち世塵に染らず、即ち煩惱を出でて、菩提の岸に至るべし。故に六波羅蜜と名づく。

又問う、經に説く所の三聚淨戒の如きは、誓いて一切の惡を断じ、誓いて一切の善を修し、誓いて一切の衆生を度するなり。今者、三毒心を制すると言うは、豈、文義に乖く所有らずや。

答曰、仏所説經⁽²³⁾、

是真実語、応無謬

也。菩薩於過去因

中、修苦行時、對

於三毒、發三誓願、

持三聚淨戒。對於

貪毒、誓斷一切惡

故⁽²⁴⁾、常脩戒。對於

嗔毒、誓脩一切善

故、常修定。對於

癡毒、誓度一切衆

生故⁽²⁵⁾、常修惠。持

如是戒定惠等三種

淨法故、能超彼毒

惡業報、成仏也。

以制三毒、則諸惡

消滅。故名之為斷。

以能持三戒、則諸

善具足、名之為修⁽²⁶⁾。

以能修能斷、則万

行成就、自他利已、

普濟群生、故名為

答えて曰く、仏の説く所の経は、是れ

真実語にして、応に謬り無かるべし。

菩薩の過去因中に於いて、苦行を修せ

し時、三毒に対して三誓願を發し、三

聚淨戒を持つ。貪毒に対するには、誓

いて一切の惡を斷するが故に、常に戒

を修す。嗔毒に対するには、誓いて一

切の善を修するが故に、常に定を修

す。癡毒に対するには、誓いて一切の

衆生を度するが故に、常に惠を修す。

是の如き戒、定、惠等の三種淨法を持

するが故に、能く彼の毒惡、業報を超

えて、仏と成るなり。三毒を制するを

以てせば、則ち諸惡消滅す。故に之を

名づけて斷と為す。能く三戒を持する

を以てせば、則ち諸善具足す。之を名

づけて修と為す。能く修し能く斷する

を以てせば、則ち万行成就し、自他利

し已り、普く群生を濟く。故に名づけ

て度と為す。知る、修する所の戒行

は、心を離れずと。若し自ら清淨なれ

ば、則ち一切衆生、皆な悉く清淨な

度。知所修戒行、

不離於心。若自清

淨、則一切衆生、

皆悉清淨。故經云、

心垢則衆生垢、心

淨故一切功德、悉

皆清淨。又云、欲

得仏、当淨其心、

隨其心淨、則仏土

淨。若制得三種毒

心、三聚淨戒、自

然成就。

又問、如經所説、

六波羅蜜者、亦名

六度。所為布施、

持戒、忍辱、精進、

禪定、智惠。今言

六根清淨名六波羅

蜜、若為通會。

又六度者、其義云

何。

り。故に經に云く、心、垢^きれば、則

ち衆生垢る。心、淨きが故に、一切の

功德、悉く皆な清淨なり。又云く、仏

を得んと欲せば、當に其の心を淨むべ

し。其の心の淨きに隨つて、則ち仏土

淨し。若し三種の毒心を制し得ば、三

聚淨戒、自然に成就す。

又問う、經に説く所の如き六波羅蜜

は、また六度と名づく。所^い為^わる^る布施、

持戒、忍辱、精進、禪定、智惠なり。

今、六根清淨を六波羅蜜と名づくと言

えり。若^い為^わん^が通^か會^んせん。又、六度と

は其の義^い云^か何^ん。

答曰、欲修六度、

当淨六根。欲淨六根、先降六賊。能捨眼賊、離諸色境、心无顧悞、名為布施。能禁耳賊、於彼声塵、不令縱逸、名為持戒。能除鼻賊、等諸香臭、自在調柔、名為忍辱。能制六賊、不貪邪味、讚詠講說、无疲厭心、名為精進。能降身賊、於諸触欲、心湛然不動、名為禪定。能攝意賊、不順無明、常修覺惠、樂諸功德、名為智惠。又、度者運也。六波羅蜜、喻如船筏、能運載衆生、達於彼

岸。故名六度。

答えて曰く、六度を修さんと欲さば、当に六根を淨むべし。六根を淨めんと欲さば、先ず六賊を降すべし。能く眼賊を捨て、諸々の色境を離れ、心に顧悞無きを、名づけて布施と為す。能く耳賊を禁じ、彼の声塵に於て、縱逸ならしめざるを、名づけて持戒と為す。能く鼻賊を除き、諸々の香臭を等しくして、自在に調柔するを、名づけて忍辱と為す。能く六賊を制し、邪味を貪らず、讚詠講說して疲厭心無きを、名づけて精進と為す。能く身賊を降し、諸々の触欲に於て、心、湛然として動ぜざるを、名づけて禪定と為す。能く意賊を攝し、無明に順わず、常に覺惠を修し、諸々の功德を樂うを、名づけて智惠と為す。又、度とは運なり。六波羅蜜は喻えば船筏の如く、能く衆生を運載して、彼岸に達せしむ。故に六度と名づく。

又問、所說釈迦如来、為菩薩時、曾飲三斗六升乳糜、方成仏道。即如是、先因食乳、後証仏果。豈唯觀心得解脱。

答曰、誠如所言、无虚妄也。必因食乳、然始成仏。言食乳者、乳有二種。仏所食者、非是世間不淨之乳、乃是真如清淨法乳。三斗者即是三聚淨戒、六升者即六波羅蜜。成道時、食如是法乳、方証仏果。若言如来食於世間姪慾和合不淨之牛羶

又問う、説く所の釈迦如来、菩薩為りし時、曾て三斗六升の乳糜を飲み、方て仏道を成ず。即ち是の如く、先に乳を食するに因りて、後に仏果を証す。豈に唯だ觀心のみにて解脱を得んや。

答えて曰く、誠に言う所の如きは、虚妄無きなり。必ず乳を食するに因りて、然して始めて仏と成る。乳を食すると言は、乳に二種有り。仏の食する所は、是れ世間不淨の乳に非ず、乃ち是れ真如清淨の法乳なり。三斗とは即ち是れ三聚淨戒、六升とは即ち六波羅蜜なり。道を成ずる時、是の如き法乳を食して、方て仏果を証す。若し如来、世間に於いて姪慾もて和合せる不淨の牛の羶腥乳を食すと言わば、豈に謗悟の甚しきを成さざらんや。如来は自ずから是れ金剛不壞、無漏法身に

腥乳者、豈不成謗⁽²⁹⁾悟之甚也。如來者自是金剛不壞、无漏法身、永離世間一切苦。豈須如是不淨之乳、以充飢渴。所說牛不在高原、不在下濕。不食穀麥糟糖麩豆。不与特牛同群、身作紫磨金色。此牛者、即盧舍那仏也。以大慈大悲憐愍⁽³¹⁾故、於清淨体中、出如是三聚淨戒、六波羅蜜、微妙法乳、養一切求解脫者。如是真牛清淨之乳、非但⁽³⁴⁾如來飲之成仏道。一切衆生若食者、皆得阿耨多羅三藐三菩提也。

して、永に世間一切の苦を離る。豈に是の如き不淨の乳を須^{もつ}いて、以つて飢渴を充たさんや。説く所の牛、高原に在らず、下濕に在らず、穀麥、糟糖、麩豆を食せず。特牛と群れを同じくせずして、身は紫磨金色を作す。此の牛とは、即ち盧舍那仏なり。大慈大悲憐愍を以つての故に、清淨なる体中^よ於り、是の如き三聚淨戒、六波羅蜜、微妙なる法乳を出して、一切の解脫を求むる者を養う。是の如き真牛の清淨なる乳は、但だ如來のみ之を飲みて仏道を成ずるに非ず。一切衆生、若し食さば、皆な阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。

又問、經中所説、⁽³⁵⁾仏令衆生、修造伽藍、⁽³⁷⁾鑄写形像、燒香散花、⁽³⁸⁾燃長明燈、晝夜六時、遶塔行道、持齋禮拜、種種功德、皆成仏道。若唯觀心惣撰諸行、説如是事、⁽³⁹⁾虚妄也。答曰、仏所説无量方便。以一切衆生鈍根狹劣不悟甚深、所以⁽⁴⁰⁾假有法喻无為。若不修行、唯只外求、希望獲福、无有是処。言伽藍者西国梵音。此地翻為清淨處。若永除三毒、常淨六根、身心湛然内外清淨。是則名為

又問う、經中に説く所にては、仏は衆生をして、伽藍を修造し、形像を鑄写し、香を燒き花を散らし、長明燈を燃やし、晝夜六時、塔を遶り道を行じ、齋を持ち禮拜し、種種の功德もて、皆な仏道を成ぜしむ。若し唯だ觀心のみ惣て諸行を撰めば、是の如くに説く事は、⁽³⁹⁾虚妄なるべし。

答えて曰く、仏の説く所には無量の方便有り。一切衆生、鈍根狹劣にして甚深を悟らざるを以て、所以に有為法を仮りて無為に喩う。若し内行を修せず、唯^{ただ}只外にのみ求めば、福を獲んと希望するに是処有ること無し。

伽藍と言は、西国梵音なり。此の地に^{ひるがえ}翻して清淨の処と為す。若し永えに三毒を除き、常に六根を淨むれば、身心湛然、内外清淨たり。是れ則ち名づけて伽藍を修むと為す。

修伽藍。

又、鑄形像者、即是一切衆生求仏道。所為修諸覺行、助像如来、豈道⁽⁴¹⁾鑄写金銅之作也。是故求解脱者、以身為鑪、以法為火、智慧為工匠、三聚淨戒、六波羅蜜以⁽⁴²⁾為面樣、鎔鍊身中真如仏性、遍入一切戒律模中、如教奉行、以充欠漏、自然成就真容之像。所謂究竟常住、微妙色身、非有為敗壞之法。若人求道、不解如是鑄写真容、憑何輒然言成就功德。

又燒香者、亦非世

又、形像を鑄るとは、即ち是れ一切衆生の仏道を求むるなり。所為⁽⁴¹⁾諸々の覺行を修し、如来を助像するとは、豈に金銅を鑄写するの作をか道わんや。是の故に解脱を求むるとは、身を以て鑪と為し、法を以て火と為し、智慧を工匠と為し、三聚淨戒、六波羅蜜を面樣と為し、身中の真如仏性を鎔鍊して、遍く一切戒律の模⁽⁴²⁾の中に入れ、教えの如くに奉行し、以て欠漏を充たさば、自然に真容の像を成就せん。所謂究竟常住、微妙色身は、有為敗壞の法に非ず。若し人、道を求むるに、是の如く真容を鑄写することを解せずんば、何を憑⁽⁴³⁾みてか輒然⁽⁴⁴⁾と功德を成就すと言わん。

又、燒香とは、亦た世間有相の香に非

間有相之香、乃是無為正法香也。薰諸臭穢⁽⁴⁵⁾無明惡業、悉令消滅。其正法香有五種體。一者戒香、所謂能斷諸惡、能修諸善。二者定香、所謂決信⁽⁴⁶⁾大乘、心无退轉。三者惠香、所謂常於身心、内外觀察。四者解脱香、所謂能斷一切无明結縛。五者解脱知見香、所謂⁽⁴⁷⁾覺照常明、通達⁽⁴⁸⁾无礙。如是五者香、世間⁽⁴⁹⁾无比。仏在世日、令諸弟子、以智慧火燒如是无價宝香、供養十方一切諸仏。今時衆生、愚癡鈍根、不

ず、乃ち是れ無為正法の香なり。諸々の臭穢⁽⁴⁵⁾無明惡業を薰じて、悉く消滅せしむ。其の正法香には五種の体有り。一は戒香、所謂能く諸惡を断じ、能く諸善を修す。二は定香、所謂大乘を决信し、心に退轉無し。三は惠香、所謂常⁽⁴⁶⁾に身心に於て、内外に觀察す。四は解脱香、所謂能く一切の無明結縛を断ず。五は解脱知見香、所謂⁽⁴⁷⁾覺照常明にして、通達⁽⁴⁸⁾無礙なり。是の如き五者の香は、世間に比する無し。仏在世の日、諸々の弟子をして、智慧の火を以て是の如き無價宝香を燒き、十方一切の諸仏を供養せしむ。今時の衆生は、愚癡鈍根にして、如来真實の義を解せず、唯だ外火を將て世間の沈檀、薰陸の如き質碍の香を燒くのみ。福報を希望するに、云何んが得べけん。

解如来真実之義。

唯將外火燒於世間
沉檀、薰陸質碍之
香⁽⁴⁸⁾。希望福報、云
何可得。

又散花者、義亦如
是。所謂演說正法
諸功德花、饒益有
情、散霑一切、於
真如性、普施莊嚴。
此功德花、仏所称
歎、究竟常住、无
彫落期。若復有人、
散如是花、獲福无
量。若如来令諸衆
生、剪截繒綵、傷⁽⁵³⁾
損草木、以為散花、
无有是處。所以者
何。持淨戒者、於諸⁽⁵⁴⁾
大地參羅万像、不
令觸犯。悞觸犯者、
獲大罪。况復今者、

故毀戒、傷損万物、
求於福報、欲益反
損。豈有是乎。

又⁽⁵⁵⁾長明燈者即正
覺心也。智惠明了、

又、散花は、義亦た是の如し。所謂る
正法を演説せし諸々の功德の花は、有
情を饒益し、一切を散霑し、真如性に
於て、普く莊嚴を施す。此の功德の花
は、仏の称歎する所にして、究竟常
住、彫落の期無し。若し復た人有り
て、是の如き花を散らさば、福を獲る
こと無量ならん。若し如来、諸々の衆
生をして、繒綵を剪截し、草木を傷損
して、以て散花と為さしめば、是処有
ること無し。所以は何ん。淨戒を持つ
者、諸々の大地參羅万像に於て、觸犯
せしめず。悞りて觸犯せば、大罪を獲
ん。況んや復た今の者、故らに戒を毀
ち、万物を傷損し、福報を求め、益を
欲しながら反つて損うをや。豈に是有
らんや。

切求解脱者、常に
身為燈台、心為燈
蓋、信為燈炷、增
諸戒行以為添油。

智惠明達、喩如燈
火常燃⁽⁵⁷⁾。如是真如

正覺燈、照破一切
癡暗。能以此法、

轉相開悟、即是一
燈燃百千燈。以一

燈統明、明終不尽。
以无尽故、号曰長

明。過去有仏、名
為燃燈。義亦如是。

愚癡衆生、不会如
来方便之説、專行

又、長明燈は、即ち正覺心なり。智惠明
了、之を喩えて燈と為すなり。是の故
に、一切の解脱を求むる者は、常に身
を以て燈台と為し、心を燈蓋と為し、
信を燈炷と為し、諸戒行を増すことは、
以て油を添うることと為す。智惠明達
は、喩えば燈火の常に燃えるが如し。

是の如き真如正覺の燈、一切の癡暗を
照破するなり。能く此の法を以て、轉
相し開悟するは、即ち是れ一燈、百千
燈を燃やす。一燈を以て明を統がば、
明終いには尽きず。尽きること無きを
以ての故に、号して長明と曰う。過去
に仏有り、名づけて燃燈と為す。義も
亦た是の如し。愚癡の衆生は如来方便
の説を会せず、専ら虚妄を行じ、有為
に執着し、遂に世間蘇油の燈を燃やし
て、以て一室を照らし、乃ち教に依る
と称す。豈に謬りならざらんか。所以

虚妄、執着有為、遂燃⁽⁵⁹⁾世間蘇油之燈、以照一室、乃称依教。豈不謬乎。所以者何。仏放眉間一毫相光⁽⁶⁰⁾、尚照於万八千世界。若身光尽照、普遍十方。豈仮如是世俗之燈、以為利益。詳察斯理、応不然乎。⁽⁶²⁾又、六時行道者、所為六根之中。於一切時、常行仏道者覚也。即是修諸覚行、調伏六根⁽⁶³⁾、淨行長時不捨、名六時行道。塔者身也。常令覚恵巡遶身心、念念不停、名為遶塔。過去聖僧、如是行道、即得

は何ん。仏、眉間一毫相の光を放たば、尚お万八千世界を照らす。若し身光尽く照らさば、十方に普遍⁽⁶⁰⁾し。豈に是の如き世俗の燈を仮りて、以て利益と為す。斯の理を詳察するに、応に然らざるべけんや。

又、六時行道とは、所為⁽⁶²⁾る六根の中(のこと)なり。一切時に於て、常に仏道を行ずるは覚なり。即ち是れ諸々の覚行を修して、六根を調伏し、淨行ならしめて長時捨⁽⁶³⁾めざるを、六時行道と名づく。塔は身なり。常に覚恵をして身心を巡遶し、念念停まらざらしむるを、名づけて遶塔と為す。過去の聖僧は、是の如く行道して即ち涅槃を得たり。解脱を求むる者、斯の理を会せずんば、何ぞ行道と名づけん。竊かに

涅槃。求解脱者、不会斯理、何名行道。竊見今時鈍根之輩、曾無内行、唯執外求、将質碍身、遶世間塔、日夜走驟、徒自疲労、而於真性、一无利益。迷悞之甚、誠可慙歎。

又、持齋者、当須⁽⁶⁴⁾会意。不達⁽⁶⁵⁾其理、徒尔虚功。齋者齊也。所謂齊⁽⁶⁶⁾整身心、不令散乱。持者護也。所謂戒行⁽⁶⁷⁾如法護持、必須禁六情制三毒、勤覚察淨⁽⁶⁸⁾身心。了如是義、所名為齋也。又、持齋者、食有五種。一者法喜食、

見るに、今時鈍根の輩、曾て内に行ずること無く、唯だ外に求むるに執するのみにして、質碍の身を将て世間の塔を遶り、日夜走驟⁽⁶⁴⁾し、徒らに自ら疲労して、真性に於いて一も利益無し。迷悞の甚しきこと、誠に慙む可けん。

又、齋を持つとは、当に須らく意を会すべし。其の理に達せずんば、徒爾⁽⁶⁵⁾らに功を虚しくせん。齋は齊⁽⁶⁶⁾なり。所謂る齊しく身心を整えて散乱せしめず。持は護なり。所謂る戒行⁽⁶⁷⁾、如法に護持せんとせば、必ず須く六情を禁じ、三毒を制して、勤めて淨身心を覚察すべし。是の如きの義を了するは、名づけて齋と為す所なり。又、齋を持つとは、食に五種有り。一は法喜食、所謂る、「如来正法に依り

所謂依如来正法、⁽⁶⁹⁾

歡喜奉行。二者禪

悅食、所謂内外澄

寂、身心悅樂。三

者念食、所謂常念

諸仏、心口相應。

四者願食、所謂行

住坐臥、常求善願。

五者解脫食、所謂

願心常清淨、不染

俗塵。此之淨食名

為齋食。若復有人、

不食如是五味清淨

食、躬言持齋者、无

有是処。言断食者、⁽⁷⁰⁾

断於无明惡業之食。⁽⁷¹⁾

若転読者破齋、云

何獲福。或有迷愚、⁽⁷²⁾

不会斯道理、身心

放逸、諸惡皆為、

貪慾恣情、了无慙

愧。唯断外道食、

て、歡喜奉行す」なり。二は禪悅食、

所謂る、「内外澄寂し、身心悅樂す」

なり。三は念食、所謂る、「常に諸仏

を念じて、心口相應す」なり。四は願

食、所謂る、「行住坐臥、常に善願を

求む」なり。五は解脫食、所謂る、「願

心常に清淨にして、俗塵に染まらず」

なり。此の淨食を名づけて齋食と為

す。若し復た人有りて、是の如き五味

の清淨食を食わずして、躬ら齋を持つ

と言わば、是処有ること無からん。断

食と言うは、無明惡業の食を断するな

り。若し転読する者、齋を破らば、云

何んが福を獲ん。或いは迷愚有り、斯

の道理を会せず、身心放逸にして、諸

惡皆く為し、貪慾恣情にして、了に

慙愧無し。唯だ道に外れし食を断する

のみにして、自ら齋を持つと謂うは、

何ぞ癡人の爛壞せし死屍を見、称して

命有りと言ふと異ならん。必ず是処無

し。

自謂持齋、何異癡

人見爛壞死屍、称

言有命。必无是處。

又、礼拝者、当須

如法也。必須理体

内明、事随推変。⁽⁷⁵⁾

理恒不捨、事有行

藏。会如是義、乃

名如法礼拝。夫礼

者敬也。拝者伏也。

所為恭敬真性、屈

伏无明、名為礼拝。

以恭敬故、不敢毀

傷。以屈伏故、无

令縱逸。若能諸惡

永滅、善念恒存、

雖不見相、常名礼

拜。其事法者、即

身相也。為欲令諸

世俗表謙下心、故

須屈伏外身、示恭

敬相。⁽⁸¹⁾ 用之則顯、

又、礼拝は、当に須く如法なるべし。

必ず須く理は体内に明らかにして、事

は随いて推変すべし。理は恒に捨め

ず、事には行藏有り。是の如き義を会

さば、乃ち如法の礼拝と名づく。夫れ

礼は敬なり。拝は伏なり。所為る、「真

性を恭敬し、無明を屈伏する」を名づ

けて礼拝と為す。恭敬を以ての故に、

敢て毀傷せず、屈伏を以ての故に、縱

逸ならしむること無し。若し能く諸惡

永えに滅し、善念恒に存さば、相を見

さずと雖も、常に礼拝と名づく。其の

事法とは、即ち身相なり。諸々の世俗

をして謙下の心を表さしめんと欲する

が為の故に、外身を屈伏して恭敬の相

を示すを須う。之を用いれば則ち顯

れ、之を捨めれば、則ち藏る。内を覺

ると外を明らかむるとは、以て相應する

なり。若し復た理法を行ぜず、唯だ事

捨之則藏。覚内明外、以相応也。若復不行理法、唯執事門、内則故縦貪癡、常為惡業、外則空現身相、何名礼拜。无慙於聖、縦誑(82)於凡、不免淪墮、豈成功德。既无所得、云何求道。

又問、温室経説、洗浴衆僧、獲福无量。此則憑於事法、功德始成。若唯觀心、可相応不。答曰、洗浴衆僧者、非世間有為事。世尊(83)當爾、為諸弟子、説温室経、欲令受持洗浴之法。是故仮諸世事、比喻真

門にのみ執さば、内は則ち故ら(ことごと)に貪癡を縦(ほし)にして、常に悪業を為し、外は則ち空しく身相を現す。何ぞ礼拜と名づけんや。聖に慙無く、縦に凡を誑(たが)さば、淪墮を免れず。豈に功德を成さん。既に得る所無し。云何んが道を求めん。

又問う、温室経には、「衆僧を洗浴せば、福を獲ること無量なり」と説く。此れ則ち事法に憑きて、功德始めて成ずるなり。若し唯だ観心のみならば、相応す可きや。答えて曰く、衆僧を洗浴するとは、世間有為の事に非ず。世尊、當爾(そのかみ)、諸々の弟子の為に温室経を説き、洗浴の法を受持せしめんと欲す。是の故に諸々の世事を仮りて、真宗に比喻し、隠して七事供養の功德を説く。

宗、隠説七事供養功德。

其七事者、第一浄水、二者燃火(84)、三者澡豆、四者楊枝、五者純灰、六者蘇膏、七者内衣。挙此七事、喻於七法。一切衆生、由此七法、洗浴莊嚴、能除三毒无明垢穢。

其七法者、一為浄戒。洗蕩僣非、如清浄水洗諸塵垢。二謂智恵。觀察内外、猶如燃火(85)温其水。三謂分別。簡弃諸惡、由如澡豆能除垢膩。四謂真実。断諸妄語、如嚼楊枝消口氣。五謂正信。決無疑慮、

其の七事とは、第一に浄水、二は燃火、三は澡豆、四は楊枝、五は純灰、六は蘇膏、七は内衣。此の七事を挙して、七法に喩う。一切衆生、此の七法に由りて洗浴莊嚴せば、能く三毒、無明の垢穢を除かん。

其の七法とは、一つには浄戒と為す。僣非(げんび)を洗蕩すること、清浄水の諸塵垢を洗うが如し。二つには智恵と謂う。内外を觀察すること、猶お燃ゆる火の其の水を温めるが如し。三つには分別と謂う。諸惡を簡棄すること、由お澡豆の能く垢膩(こうじ)を除くが如し。四つには真実と謂う。諸々の妄語を断ずること、楊枝を嚼(か)みて能く口氣を消すが如し。五つには正信と謂う。決して疑慮無きこと、灰の身を磨きて能く諸風を

如灰磨身能避諸風。六謂調柔。和剛強、由如蘇膏通潤皮膚。七謂慙愧。滅諸惡業、由如內衣遮弊醜形。如上七法、並是經中秘密之義。如來當爾⁽⁸⁶⁾⁽⁸⁷⁾為諸大乘利根者說、非為小智下劣凡夫。所以今人无能悟解。其温室者、即身是也。所以燃⁽⁸⁸⁾智惠火、溫淨戒湯、洗浴身中真如仏性、受持七法、以自莊嚴。當爾⁽⁸⁹⁾比丘、聰明利智、皆悟聖意⁽⁹⁰⁾。如說修行、功德成就、俱登聖果。今時衆生、愚癡鈍根、莫測其事、將世間水、

避くるが如し。六つには調柔と謂う。剛強を和すこと、由お蘇膏の皮膚を通潤するが如し。七つには慙愧と謂う。諸々の悪業を滅すること、由お內衣の醜形を遮弊するが如し。如上の七法は、並びに是れ經中秘密の義。如來、當爾⁽⁸⁶⁾⁽⁸⁷⁾、諸々の大乘利根の者の為に説く。小智下劣の凡夫の為には非ず。所以に今人は、能く悟解すること無し。其の温室とは、即ち身是れなり。所以に智惠の火を燃やし、淨戒の湯を温め、身中の真如仏性を洗浴し、七法を受持して、以て自ら莊嚴す。當爾⁽⁸⁹⁾の比丘は、聰明利智にして、皆な聖意を悟り、説の如く修行して、功德成就し、俱に聖果に登る。今時の衆生は、愚癡鈍根にして、其の事を測ること莫く、世間の水を將って、質碍の身を洗い、自ら經に依ると為す。豈に悞⁽⁹¹⁾りに非ざらんや。且つ真如仏性は、是れ凡形、

洗質碍身、自為依經。豈非悞⁽⁹¹⁾也。且真如仏性、非是凡形煩惱塵埃、本来无相。豈可將有碍水、洗无碍身。事不相応、云何可得。若言碍身清淨、當觀此身、元因貪欲、不淨所生、臭穢駢闐、内外充滿。若洗此身、求於淨者、猶如洗塹、泥尽則応停。以此驗之、明知外洗非仏説也。又問、如經所説、至心念仏必得解脱⁽⁹³⁾。此一門、即応成仏。何仮觀心求於解脱。答曰、夫念仏者、

煩惱、塵埃に非ず、本来無相なり。豈に有碍の水を將て、無碍の身を洗う可けん。事、相應せず、云何んが得可けん。若し碍身清淨と言わば、當に此の身の貪欲に元因し、不淨の生ずる所に於て、臭穢駢闐⁽⁹²⁾し、内外に充滿せしを觀るべし。若し此の身を洗いて淨を求めば、猶お塹⁽⁹⁴⁾を洗い、泥尽くれば、則ち應に停すべきが如し。此を以て之を驗れば、明らかに、外洗は仏説に非ざることを知りぬ。又問う、經に説く所の如きは、至心に念ずれば必ず解脱を得べしと。此の一門、即ち應に成仏すべし。何ぞ觀心を仮りて、解脱を求めん。答えて曰く、夫れ念仏は、當に須く正

当須正念。⁽⁹⁵⁾了義為正。若不了義、即為邪念。正念仏、必得往生淨國。邪念云何達彼岸。仏者覺也。所為覺察身心、勿令起惡。念者憶也。⁽⁹⁶⁾所謂堅持戒行、不忘精勤。⁽⁹⁷⁾了如来義名為正念。故知念在於心、不在於言。因筌求魚、得魚忘筌。⁽⁹⁸⁾因言求意、得意忘言。⁽⁹⁹⁾既称念仏之名、須行念仏之体。若心无実体、口誦空名、徒念虚功。有何成益。且如誦之与念、名義懸殊。在口曰誦、在心曰念。故知念従心起、名為

しく念ずべし。義を了するを正と為し、若し義を了せずんば、即ち邪念と為す。正しく仏を念ずれば、必ず淨國に往生するを得べし。邪まに念じて、云何んが彼岸に達せん。仏とは覺なり。所為る身心を覺察し、惡を起さしむること勿しなり。念は憶なり。所謂堅く戒行を持ち、精勤を忘れざるなり。如来の義を了するを、名づけて正念と為す。故に知りぬ、念は心に在りて、言には在らざることを。筌^{ふせ}に因りて魚を求め、魚を得て筌を忘る。言に因りて意を求め、意を得て言を忘る。既に念仏の名を称せば、須く念仏の体を行ずべし。若し心に実の体無くんば、口に空名を誦し、徒らに虚功を念ず。何の益を成すことか有らん。且つ誦すると念ずるとは、名義、懸かに殊れり。口に在るを誦すると曰い、心に在るを念ずると曰う。故に知りぬ、念の心より起るを名づけて覺行の門と為すことを。口中に誦するは、即ち是

覺行之門。⁽¹⁰⁰⁾誦在口中、即是音声之相。執相求福、終无是処乎。故経曰、凡所有相、皆是虚妄。又云、若以色見我、以音声求我、是人行邪道、不能見如来。以此觀之、乃知事相非真正也。故知過去諸仏所修功德、皆非外説、唯只論心。心是衆善之源。心是万惡之主。涅槃淨樂、由自心生。三界輪廻、亦従心起。心為出世之門戸、心是解脱之関津。知識関津者、何憂不達。

れ音声の相なり。相に執して福を求めれば、終に是処無からん。故に経に曰く、「凡そ相有る所は、皆な是れ虚妄なり」と。又云く、「若し色を以て我を見、音声を以て我を求むれば、是の人、邪道を行じ、如来を見る能わず」と。此を以て之を觀れば、乃ち事相は真正に非ざることを知りぬ。故に知りぬ、過去の諸仏修する所の功德は、皆な外説に非ず、唯^{ただ}只心を論ずるのみと。心は是れ衆善の源。心は是れ万惡の主。涅槃淨樂は自心より生じ、三界輪廻も亦た心より起る。心は出世の門戸^た為り。心は是れ解脱の関津。門戸を知る者、豈に成し難きを慮らん。関津を識る者、何ぞ達せざるを憂えん。

竊見今時淺識、唯執事相為功。広費財宝、多損水陸、妄營像塔、虚役人夫、積木疊泥、囟丹画緑、傾心尽力、損己迷他。未解慙愧、何曾覚悟。見有為勤勤執着。説於无相、兀兀如迷。且貪目下之小慈、不覺⁽¹⁰⁶⁾当来之大苦。此之脩学、徒自疲勞、背正帰邪、詐言獲福。但能摂心内照、覚観常明、絶三毒永使消亡、⁽¹⁰⁷⁾閑六賊不令侵擾、自然恒沙功德、種種莊嚴、无数法門、悉皆成就。超凡証聖、目撃非遙。悟

竊かに見るに、今時の淺識は、唯だ事相に執して功を為すのみ。広く財宝を費し、多く水陸を損い、妄りに像塔を営み、虚しく人夫を役し、木を積み泥を疊ね、丹を囟き緑を画き、心を傾けて力を尽し、己を損い他を迷わす。未だ慙愧を解せず、何ぞ曾て覚悟せん。有為を見て勤々として執着し、無相を説きて兀々として迷うが如し。且つ目下の小慈を貪りて、当に来るべきの大苦を覚らず。此の修学は、徒らに自ら疲勞し、正に背きて邪に帰し、詐きて、福を獲る、と言えり。但だ能く心を摂め内に照らし、覚観常に明らかにし、三毒を絶して永えに消亡せしめ、六賊を閑^{かき}ぎて侵擾^{しんじょう}せしめずしてのみ、自然に恒沙の功德、種々の莊嚴、無数の法門、悉く皆な成就す。凡を超え聖を証するは、目撃にして遙^{はるか}には非ず。悟は須臾に在り。何ぞ皓首を煩わさん。法門は幽秘なり。寧ぞ具陳す可けん。略して心を論じて、其の少分を詳

在須臾、何煩皓首。法門幽秘、寧可具陳。略而論心、詳其少分。説偈曰、
 嗔是忍辱花
 喜是忍辱菓
 花来便摘却
 菓来无處生

かにす。
 偈を説きて曰く、
 嗔は是れ忍辱の花、
 喜は是れ忍辱の菓。
 花来らば便ち摘却し、
 菓来らば処の生ずる無し。

注

- (1) 底本「因根」を「自心根本」とす。○(金)目により改む。
- (2) 底本「名」を「凡」とす。○(金)目により改む。
- (3) 底本「故」の下に「故」あり。他の五本によりとる。
- (4) 底本「倍」なし。他の五本により補う。
- (5) 底本「无窮」なし。○(金)目により補う。
- (6) 底本「三界者即是」なし。○(金)目により補う。
- (7) 底本「也」を「者」とす。○(金)目により改む。
- (8) 底本「由」なし。○(金)目により補う。
- (9) 底本「修」を「順」とす。他の五本により改む。
- (10) 底本「天」を「六」とす。○(金)目により改む。
- (11) 底本「苦」を「善」とす。○(金)目により改む。
- (12) 底本「由」なし。○(金)目により補う。
- (13) 底本「有」なし。○(金)目により補う。
- (14) 底本「仏」なし。○(金)目により補う。
- (15) 底本「聚」を「趣」とす。○(金)目により改む。
- (16) 底本「行」なし。○(金)目により補う。
- (17) 底本「仏」を「覚」とす。○(金)目により改む。

- (18) 底本「答曰」なし。○(目)により補う。
- (19) 底本「聚」を「趣」とす。○(目)により改む。
- (20) 底本「聚者会」を「趣貪者」とす。他の五本により改む。
- (21) 底本「聚」を「趣」とす。他の五本により改む。
- (22) 底本「今」なし。○(目)により補う。
- (23) 底本「経、是真実語、応無謬也。菩薩於過去因中、修苦行時、對於三毒、発三誓願、持三聚淨戒。」を「三毒者」とす。鈴木氏校定の○(目)により改む。
- (24) 底本「故」なし。○(目)により補う。
- (25) 底本「故」なし。他の五本により補う。
- (26) 底本「修」を「戒」とす。他の五本により改む。
- (27) 底本「能」なし。○(目)により補う。
- (28) 底本「名」なし。○(目)により補う。
- (29) 底本「成」を「誠」とす。○(目)により改む。
- (30) 底本「原」を「源」とす。○(目)により改む。
- (31) 底本「愍」を「敏」とす。他の五本により改む。
- (32) 底本「求」の下に「清淨」あり。他の五本によりとる。
- (33) 底本「牛」を「中」とす。○(目)により改む。
- (34) 底本「但」を「真」とす。○(目)により改む。
- (35) 底本「令」なし。○(目)により補う。
- (36) 底本「造」なし。○(目)により補う。
- (37) 底本「写」なし。○(目)により補う。
- (38) 底本「燃」を「然」とす。○(目)により改む。
- (39) 底本「也」なし。他の五本により補う。
- (40) 底本「修」なし。○(目)により補う。
- (41) 底本「道」を「道」とす。○(目)により改む。
- (42) 底本「為」を「六波羅蜜」の前に置く。○(目)により改む。
- (43) 底本「臭穢無明惡業」を「穢惡」とす。○(目)により改む。
- (44) 底本「信」を「定」とす。○(目)により改む。

- (45) 底本「明」なし。他の五本により補う。
- (46) 底本「達」なし。他の五本により補う。
- (47) 底本「无」の下に「以」あり。他の五本によりとる。
- (48) 底本「香」の下に「者」あり。○(目)により改む。
- (49) 底本「諸」を「説」とす。○(目)により改む。
- (50) 底本「花」を「者」とす。○(目)により改む。
- (51) 底本「花」の下に「也」あり。他の五本によりとる。
- (52) 底本「如来」なし。他の五本により補う。
- (53) 底本「傷」を「復」とす。他の五本により改む。
- (54) 底本「淨」なし。他の五本により補う。
- (55) 底本「又」の下に「問」あり。他の五本によりとる。
- (56) 底本「覺心」を「心覺」とす。他の五本により改む。
- (57) 底本「燃」を「然」とす。○(目)により改む。
- (58) 底本「燃」を「然」とす。○(目)により改む。
- (59) 底本「燃」を「然」とす。○(目)により改む。
- (60) 底本「相」を「一」とす。○(目)により改む。
- (61) 底本「万八千世界」を「八万千界」とす。○(目)により改む。
- (62) 底本「又」の下に「問」あり。他の五本によりとる。
- (63) 底本「根」の下に「六情」あり。○(目)により改む。
- (64) 底本「須会」なし。○(目)により補う。
- (65) 底本「不」なし。○(目)により補う。
- (66) 底本「整」を「愍」とす。○(目)により改む。
- (67) 底本「如」を「諸」とす。他の五本により改む。
- (68) 底本「淨」なし。○(目)により補う。
- (69) 底本「来」なし。○(目)により補う。
- (70) 底本「言」なし。○(目)により補う。
- (71) 底本「断」を「斯」とす。○(目)により改む。
- (72) 底本「者」なし。○(目)により補う。
- (73) 底本「断」なし。○(目)により補う。

- (74) 底本「会」なし。④により補う。
- (75) 底本「事随」を「随事」とす。④(金)目により改む。
- (76) 底本「故」なし。④(金)朝目により補う。
- (77) 底本「故」なし。④(金)朝目により補う。
- (78) 底本「為」なし。④(金)により補う。
- (79) 底本「身」を「心」とす。④(金)朝目により改む。
- (80) 底本「示」なし。④(金)目により補う。
- (81) 底本「相」なし。④(金)朝目により補う。
- (82) 底本「縦」を「徒」とす。④により改む。
- (83) 底本「爾」を「示」とす。④(金)朝目により改む。
- (84) 底本「燃」を「然」とす。④(朝)目により改む。
- (85) 底本「燃」を「然」とす。④(朝)目により改む。
- (86) 底本「爾」を「示」とす。④(金)朝目により改む。
- (87) 底本「為」なし。他の五本により補う。
- (88) 底本「燃」を「然」とす。④により改む。
- (89) 底本「爾」を「令」とす。④(金)朝目により改む。
- (90) 底本「聖」を「仏」とす。他の五本により改む。
- (91) 底本「悞」を「悟」とす。④(金)により改む。
- (92) 底本「真」なし。④(金)朝目により補う。
- (93) 底本「至心」なし。他の五本により補う。
- (94) 底本「此一門、即成成仏。何仮観心求於解脱。」なし。④により補う。
- (95) 底本「了義為正」なし。④(金)朝目により補う。
- (96) 底本「所」なし。④(金)朝目により補う。
- (97) 底本「忘」を「妄」とす。④(金)朝目により改む。
- (98) 底本「忘」を「妄」とす。④(金)朝目により改む。
- (99) 底本「忘」を「妄」とす。④(金)朝目により改む。
- (100) 底本「之門」なし。④(金)朝目により補う。
- (101) 底本「相」を「着」とす。④(金)朝目により改む。
- (102) 底本「処」なし。④(金)目により補う。

- (103) 底本「丹」を「舟」とす。④により改む。
- (104) 底本「緑」を「像」とす。④(金)朝目により改む。
- (105) 底本「見有為」を「有此」とす。他の五本により改む。
- (106) 底本「覚」の下に「入」あり。他の五本により改む。
- (107) 底本「閑」なし。④(金)目により補う。